



日本から中央アジアへのまなざし..

近代新疆と日露関係

野田 仁 早稲田大学イスラーム地域研究機構次席研究員／研究院講師

はじめに

日本におけるイスラーム研究が進展するいま、イスラームないしムスリムに対して、日本がどのような視線を投げかけてきたのかという原点とも言うべき問題を考えるとき、中央アジアより狭義には新疆・東トルキスタンへのまなざしはその嚆矢として注目に値する。当然のことながら、そのまなざしは、当時の国際事情と近代日本の置かれていた立場に大きく依存している。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての日本¹⁾のイスラーム認識の一端として、中央アジアにおける調査とその背景を明らかにすることが本稿の目的である。

筆者がこのようなテーマに取り組むことになった契機としては、カザフスタン国立文書館における調査がある。同館には日本から中央アジアに調査に訪れた者たちの記録が、断片的ではあるにせよ、収められているからである²⁾。当時のロシア帝国の行政文書の中にこれらの記録は見出されるが、そのこと自体が、ロシア⇨日本関係の中に、日本による中央アジア調査を位置づけなければならないことを示している。

とはいえこれまでの研究の蓄積も少なくはない。とくに、二〇世紀初頭の日本人の新疆潜入については、日中両国の研究が言及している³⁾。ただし、そこでは日本の対中国政策としての新疆への関心がおもな研究対象となってきた⁴⁾。より視野を広げてみると、日本のこの地域への関心は、むしろロシアとの関係の中で説明すべきことが明らかになる。対ロシア政策の一環としての側面はすでに王柯が多くのことを明らかにしている⁵⁾。それでも、

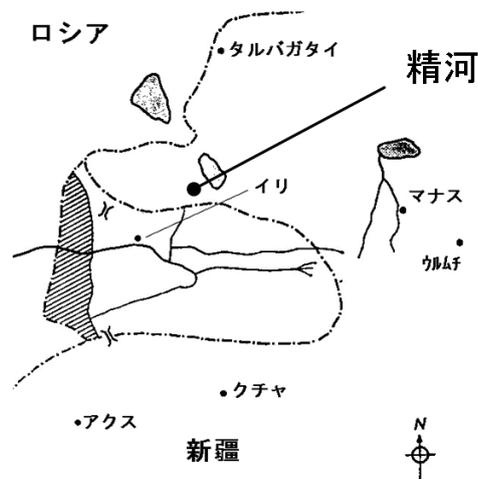
調査報告そのものの分析、またロシア側の思惑・現地の視線などに検討すべき余地もあろう。

本稿が目指すのは、国際関係、とくに日露関係を踏まえた上での新疆・中央アジアへの関心を読み解く作業である。そこには、当時ロシアとの対立を深めていた英国の思惑―新疆のみならず、チベットへの関与も含み、さらにそれはチベットに対するロシアの関心とも交錯する―も入ってくる。これらの勢力がぶつかる地点として新疆・中央アジアが浮上したときに、改めて多くのムスリムが住まう空間として認識されたことは間違いなく、日本におけるイメージも再確認できるだろう。言いかえれば、日本による中央アジア調査を日本のイスラームとの接触の初期と位置付け、その認識・政策・国際関係の交わる場所を描きつつ、歴史的背景から掘り起こすことを目指したい。対象とする時代は、一八七〇～一九一〇年前後である。

したがって予想される見取り図を先に提示しておく、日露英の三者（さらには当然のことながら清朝そのものも含む）の思惑が交わる場としての新疆・中央アジアの像である。さらに、国際関係上の位置のみならず、ローカルのムスリムがどのような立場にあったのかを検討することで、より立体的な像を描くことができるに違いない。後者についてはまだ作業の端緒に過ぎないが、現時点での見通しをつけておきたい。

一 イリ地方をめぐる国際関係と日本

ロシア帝国の中央アジア征服の延長上に位置づけられるイリ事件（一八七一年）によって、短期間ながらロシアが清朝領の新疆北部を占領す



地図2：イリ地方拡大図
網掛け部は返還されずロシア領となった部分である
(野田(2009)162頁)。

名乗る日本人官吏であることが判明したため、そのような人物が精河・大河沿の視察のために清朝領内に居ることを問い糺す主旨であった。それに対して、ロシア側は、光緒六年一月二一日付けで、日本外交官の Ziss が精河に入ったことは確認しつつも、Siderian なる日本人はそもそもロシアの旅券を持っていないのでロシアも把握しておらず、名も西とはまったく異なる別人であるという論理で清側からの照会に正面から応えなかった¹²⁾。ロシアの保護を受けていたからこそ成功した調査だったが、緊張した露清国境地帯の様子的一端がうかがえるであろう。

この西の探查の背景には、琉球や台湾の領有に関連して、日本政府がイリ返還交渉（イリ地方のロシアから清朝への返還について、一八八一年のペテルブルク条約締結に至る過程）に注目していたことが挙げられよう¹³⁾。そのことは西による「伊犁論」の内容にも色濃く反映されている。この伊犁条約交渉が琉球問題へ影響を与えるという認識は、天津領事の竹添進一郎から伊藤博文・井上毅宛ての文書¹⁴⁾によく示されている。もちろん日本の立場としては、露清どちらにも与しないとするものであった¹⁵⁾が、西の行動が示すように大いに注目していたことは間違いない。補足すれば、イギリスもまた、琉球問題と絡んで日本の関心がこのイリをめぐる露清交渉にあることが付いていた¹⁶⁾。

ロシアは、逆にこのときの日本の清に対する態度について情報を集めてい

た¹⁷⁾。前出の英国外交文書によれば、駐東京代理公使・総領事のシユートルーベは、日本が中立を保持できるとは考えていなかったらしい。ロシア政府が西の旅行を保証した背景には、日本を親清の立場から遠ざけたいロシア側の思惑も透けて見える。

西の調査および露清の国境交渉の過程は、日本にとっては、新疆の後方に位置するロシアの存在感を強く意識する契機となったと考えられる。その後、ロシアの動向が紙面を賑わす中で、次のような記事が新聞に掲載されることもあった。すなわち一九〇〇年の記事「露国伊犁方面に運動す」は、「支那官吏の電報によれば多数の露兵の伊犁固爾札地方に動きつつあり」と述べ、国内の関心の高まりがうかがえるのである¹⁸⁾。

二 日露戦争から中央アジア調査へ

先に述べたように、ロシアが中国西北、すなわち新疆の背後に影響力を持っていることが明らかになった以上、日本からの視線は絶えることがなかった¹⁹⁾。その一方で、ロシア側も日清戦争以降の日本の清における影響力拡大に神経をとがらせていたのである。そのことは、ロシアが中国の主要都市に派遣していた武官たちの報告にも表れている²⁰⁾。

これから本章で分析しようとする日本による諜報へのロシア側の対応は²¹⁾、おもに陸軍参謀本部（副次的に外務省も）が担当していた。たとえば、シベリアに入った日本人についても把握しており²²⁾、名高い一八九二年の福島安正のシベリア横断や、一九〇六年九月にシベリアに入った M. P. Ioyama²³⁾ と K. S. Nagege、あるいは、一九一一年六月、シベリアからモロゴルを経由し北新疆へ潜入したという Izome Rokuro および Kusaka Misao²⁴⁾らの動向も詳細に捕捉されていたらしい。

中国においては、要所に配備した陸軍武官のみならず、新疆における各領事館（カシユガル・イリ・タルバガタイ・ウルムチ）からの情報は重要な位置を占めていた。このようなロシア側の観察・把握は、ロシアの新疆への関心の高さにも基づいていると考えられる²⁵⁾。

ロシア側の日本とムスリムの連携に対する警戒心を見る上で、トルキスタンの軍属にあったスネサレフによる論説²⁶⁾は興味深い。日本におけるイスラームにかなする知識の増大やイスラーム世界における勢力拡大政策に注目し、英独と並び、日本もイスラームを利用した戦略を立てていることを指摘

したからである。また、一九〇二年の日英同盟締結もロシア側には一層の日本に対する警戒心を生んだに違いなく、それは、日露戦争の中でピークに達したと考えられる。このとき大谷光瑞が率いる探検隊（第一次）はロシア領トルキスタンを通り新疆に入ろうとしていたが、彼らにも当然、疑惑の目が向けられていた²⁷⁾。

日本からの現地調査隊が組織されるのは、実際には、日露戦争後のこととなる。名前を挙げれば、波多野養作²⁸⁾、林出賢次郎および新疆經由で蒙古へ向かった櫻井好孝、草政吉、三浦稔、陸軍少佐の日野強、さらに上原多市²⁹⁾が知られている。その事実自体はすでに周知のものだが、ここでは彼らの調査とロシアの関係に注目したい。たとえば波多野養作の調査について、藤田佳久「二〇〇〇・九七」は「中国・西域踏査旅行」と位置づけているが、そもその目的として対ロシア情勢の把握があったことをより重視すべきではないかと考えるのである³⁰⁾。

個々の調査の詳細は後述するとして、これらの潜入調査についてロシア側の捕捉するところとなっていたことも興味深い事実である。一例として、以下の史料を検討したい。史料一は、一九〇五年六月二八日（ユリウス暦）付け、在ヴェルヌイのセミレチエ州軍務知事発、同州軍司令部宛て機密文書である³¹⁾。時系列順にすれば、この文書の添付文書が先行する。すなわち、同年六月一三日付け、陸軍参謀本部からトルキスタン軍管区司令宛ての機密電文の写しの写し^①であり、「上海と北京からの電文によれば、日本の間諜ハヤシデーコマツイーハラ、別の呼び方としてコマツイーバラハヤシ³²⁾、が出発地点に到着した。彼に与えられた任務は、間諜とスパイの部隊を組織し、日本の宣伝を広め、我々のトルキスタン「西トルキスタン」をよく知るために、中国領トルキスタンの我が国と接する地域とカシユガルを、訪れることであつた」と述べている。次の六月二〇日付け、セミレチエ州軍司令部宛て文書が主文である^②。

司令の命令にしたがつて、当該の写し「①」を送付しつつ、件の日本人の出現と彼の活動とが、我々の手をすり抜けないようにするためにしかるべき手段を取ることに付いて、以下の伝達を不可欠とみなす。もし電文中に名の挙がっているスパイをとらえ、我が領内に連行する可能性が生じた場合には、確実に、その人物が、電文中に記載の日本スパイ、ハヤシデーコマツイーハラもしくはコマツイーバラハヤシでなければならぬ……「後略」

①の参謀本部からの情報を受けて、トルキスタン総督府から管轄下のセミレチエ州に対して、「しかるべき手段」として警戒と捕縛・連行を命じたことが②からわかる。他の文書史料に当たってみると、日本人官員が一九〇五年二月にタルバガタイにいたという情報が記され³³⁾、あるいはウルムチに日本人の軍事顧問がいるという情報³⁴⁾も届いていた。このような日本から新疆への来訪者について、影響力確保に努めるロシアが排除を狙っていたことは明らかである。しかも、この日本人による調査は日英の協議に由来する派遣であつた。史料一で名指しされている林出賢次郎は、一九〇五年三月に上海の東亜同文書院を卒業し、根津一院長より調査の依頼を受けたが、その経緯は、林出本人の回想中に以下のように記されている。

実は英国政府とわが外務省と商議の結果、英国はインド国境から新疆省西南端カシユガルまで調査員を出し、日本からは新疆省の伊犁より蒙古の科布多、烏里雅蘇台、庫倫方面に調査員を出して外蒙、新疆の国境地方を調査することとなり、外務省からこれら方面へ派遣する青年を同文書院から推薦せよとのことで……「後略」³⁵⁾

新疆南部は英国も守備範囲としていたが、北部はロシアの勢力圏であり、その調査が日本側に任されていたと言うのである。林出はこれを受け七月には北京を発つたが、出立の状況がすでにロシアの駐在武官ないし領事館によって捕捉されていたことになる。

英国の動きは後でも触れることとして、日本政府の方針、当時の日本側の情報収集を考えてみると、間接的情報から直接調査への転換を見ることができる。日露戦争直後までは、以下に示すように中国筋からの間接的情報に拠る所が大きかつた。清国駐屯軍司令官仙波太郎からの報告として、満洲の代わりにイリ地方をロシアがねらっているとの情報が伝えられていた³⁶⁾。同様に、清国駐屯軍司令官神尾光臣の報告は、清国外務部の情報に基づき、ロシアの新疆への鉄道敷設の意図を伝えている³⁷⁾。したがって日本とロシアは相互に警戒し合っていたとも言える。一方で、清朝もロシアへの警戒を強めていた。やや時間は前後するが、清の理藩院尚書（長官）の情報として、清が新疆・西蒙古に視察団を派遣しようとしていること、さらにその理由として「新疆は……「中略」……露人の常に垂涎とする所なり」という危惧が示されている³⁸⁾。

これらのロシア進出に関連する情報をたしかめるべく、前述の調査員が派遣されたのであった。これが日本政府の主導の下にあったことは、外相小村寿太郎から清国公使の内田宛て文書⁴³において「清国辺境における露国の動静」を「視察」する五名の派遣について言明している所からも明らかである。なお、同じく外相から内田宛て八月五日の文書は、彼らへの費用送金が「機密費」として扱われていることを示す。

しかしながら、実際のロシアの警戒・情報網はこの地方において非常に強く、波多野の現地からの通信文⁴⁴においても、ウルムチ（迪化）滞在時に桜井・林出とともにただちにロシア人の知る所となった旨が記されている。ほかにも、「明治三十九年七月五日駐屯軍報告第一六号」⁴⁵という文書は、伊犁への旅行者からの報告書であり、旅程からすると林出からのものと考えられる。この中では、ロシアの日本人に対する警戒が強調されており、宿泊先にも踏み込まれた様子が報告されている。より具体的なロシア側の方針については、先に見た史料一が如実に物語っていると見えよう。

ロシアは日英の同盟に脅威を覚えていた一方で、英国との中央アジアをめぐる交渉も並行しておこなっていたことに注意しなければならない。グレコフは、ロシア側の資料に基づいて、日本との関係にもらみながらロシアが英国へ接近した過程を明らかにしている [Tykov 2000: 39-42]。これは周知の通り、英露協商として結実するにいたった。この流れの中に、それまで対立していた駐カシユガル英国「領事」マカートニーに対するロシア領トルキスタン通過許可（一九〇八年）もあつた⁴⁶。さらにチベットについてもすでにロシアはダライラマ一三世と接触するなど働きかけを強めていた⁴⁷。結果として、新疆全体が露日に英国を加えた三者の視線が交錯する場となつていたのであり、このときの日本人派遣も日露戦争の延長上に位置づけられるだろう。

三 新疆調査の報告書

前章では日本人による新疆調査の背景を検討した。本章では、東亜同文書院卒業生による調査に焦点を当て、調査後に作成された視察復命書の分析を行う。彼らの復命書は、外務省政務局に宛てられていた⁴⁸。ただし、外相林董より陸相寺内宛ての文書から⁴⁹、復命書の印刷版を陸軍省（軍務局）にも送付していたことが明らかになる。東亜同文書院長の根津一の活動一

くに士官学校同期の宇都宮太郎（のち参謀本部第二部長）との交友関係も併せて、背後には陸軍参謀本部の意向がうかがえる⁴⁶。

五名の復命書の内、「外蒙古視察復命書」は草（烏里雅蘇台^{ウリヤスライ}）および三浦（庫倫^{クレン}）による情報で新疆との関連性は低い。ただし、外モンゴルにおいても露国商人の存在が指摘されていることは興味深い。桜井による「蒙古視察復命書」は、科布多^{コブド}方面および新疆についての情報で構成されている。露国商人や通貨ルーブルの普及などに言及するものの、新疆ではウルムチと古城にしか滞在しておらず記述量も多くない。

また、波多野による『新疆視察復命書』⁴⁷の内容は、藤田「二〇〇」がくわしく検討した日誌と重なる所が多い。同時期の林出による報告書と比較すると、波多野がウルムチを長く拠点として、前線であるイリには一カ月弱という短期の滞在にとどまったのに対し、林出はイリからさらに北方のタルバグタイまで至っており⁴⁸、記述量にも地域により濃淡が見られる。たとえば波多野のそれは新疆以外の蘭州や西寧などの情報も多く含んでいるのである。したがって、検討の中心には、やはり林出による『清国新疆省伊犁地方視察復命書』を据えることにしたい⁴⁹。この報告書は、まさに外務省の要請にしたがってロシアの新疆における影響力を探るレポートであり、「露国の新疆経営」「林出…六七」に大いに注目している点を特徴とする。

とは言え、波多野・林出両者の報告書の間で、見出しには共通する所が多いこともたしかであり、ここでは幾つかの項目について両名の報告書の情報を元にして検討してみたい。

①ロシアの勢力・ロシア領事館が新疆内のカシユガル、ウルムチ、イリ、タルバグタイ各地にあり、さらにそれらを拠点としてコサック兵が駐屯していることが示されている [波多野…七七―七八、林出…一一]。領事および領事館員が現地情勢や海外からの諜報活動について様々な情報を収集していたことはすでに示した通りである。

②ロシア領からの移住者・商人・露清国境における貿易に従事する者として、ロシア国籍を持つ者と、清の領内・ロシア領内双方の「纏頭」（ターバンで頭を覆うの意、ムスリム）が示されている [波多野…六六―六七]。くわしく見ると、ロシア国籍者は、実際には「スラブ」は少なく、ロシア領である「タシケント」「アンヂェン」地方出身のムスリムや、「ノカイ」と呼ばれていたタタール人が多かった⁵⁰。またとくに前二者―ロシ

ア領トルキスタンのムスリムは商人としてこの地域に留まっていた「林出…五四」。

③通信と交通…郵便・電信についてはロシアのネットワークが新疆の都市までつながっていたという「波多野…三〇—三二」、林出…三六。鉄道について、清が進めていた伊犁—蘭州間の鉄道敷設が難航していることに言及し、ロシアがすでにセミパラチンスク—タシケント間を接続済みである状況と対比した⁵⁴。またロシアが上の「新疆鉄道」開通に際して自国の路線と接続することへの危惧も示されていた「林出…七四」。満洲の例からも明らかのように鉄道敷設は影響力拡大に大きな意味を持っていたのである。

④現地ムスリム…共通して、「回民⁵⁵」と纏頭（今日のウイグル人）とを区別している点が挙げられる「林出…一八—二〇」。回民については、「大反乱を起こした者たち」という認識が繰り返され登場する「波多野…三八」。一方でテュルク系ムスリムについては「土耳其斯坦人」という表現も見られ、波多野によれば「露清両国に分属」する者たちで、「小教「回民」の乱に際し「ても」…「中略」…自己も同じく回教徒「ムスリム」たりながら両端を持って敢えて動かざりしが如き」であり「波多野…四〇—四一」、両者は行動をともにしていたわけではなかった。また波多野は、ロシア側のムスリムが清側のムスリムに対する優越感を持っていたことも指摘している。

以上、いくつかの項目に限って波多野・林出の新疆調査の結果を整理したが、全体としては、長期にわたる現地滞在によって、イスラームをも媒介にした⁵⁶ロシアの影響力拡大と現地の情勢については、相当に正確な情報をつかむことが出来ていたと見てよいだろう。

なお、林出の報告書の中でさらに注目できる点として、巻末において日本の取るべき方針について献策を行っている点がある。その提言は、「清国は天山南北路の広大な地域を有し」「中略」…「中略」…只之を腐敗官吏の金儲け場として…「中略」…無用視去りしが、日露の戦争より以来露国の活動一変し…「中略」…日本人が清国人の後見者となり補助者とな「れば」…「中略」…新疆と日本との連絡堅固とな「る」…「後略」…「林出…七一—七五」というもので、その後の日本の新疆方面での工作と重なる点もあろうように見受けられる。この点は次章でもう一度振り返ることとした

い。

東亜同文書院の一行に続いて、一九〇七年初頭に新疆に入った日野強については、その旅行記が早くから出版（一九〇九年）されていたこともあり、情報は出尽くした感もある⁵⁷。日野が直接陸軍参謀本部に提出したであろう報告書や関連する指令などが見つからない以上、ここでは別の観点からロシアからの視線について—簡単に再検討するにとどめたい。

具体的にはフィンランド系ロシア軍人のマンネルヘイムの報告書⁵⁸に目を向ける必要がある。すでに述べたロシア側の諜報網における日本人の新疆進出の噂・警戒感、日野と同時期に新疆に入っていたマンネルヘイムも承知していることであった「Mannerheim 1909: 4」。その報告の中に日野の名が現れている。報告書では、日野と同じ路をたどっていた様子を次のように記している⁵⁹。

私のすぐ前を、写真撮影をしながら、「トルグートの」ハンの居所を通じて、制服姿の日本軍人少佐の Hino が、数名の中国官員を伴い通って行った
[Mannerheim 1909: 28]。

こうした日野の存在自体が、ロシア側に伝わっていた日本人の新疆における影響力拡大を裏付けるものであった。また、日野はこのときのイリ將軍の長庚と親交を持ったが「日野 一九七三…第一部一八五」、マンネルヘイムは長庚の親日的態度にも着目して、これを日野の滞在と結び付けている「Mannerheim 1909: 33」。

なお、日野は新疆におけるロシアの勢力について一章を割き⁶⁰、さらなる調査の必要性を主張した「日野 一九七三…第二部二〇七」。中国内地からイリへと至る鉄道については、林出らとは逆に、新疆の発展のためにむしろ清国が設けるべきであると述べている「日野 一九七三…第一部一八八、第二部一六〇」。他にも興味深い記述を多く残しているが、波多野・林出らの報告との比較も含め、よりくわしい分析については他日を期す。

四 現地からの視点

このような国際関係上の戦略の交点となっていた新疆現地の認識は、どのように考えればよいだろうか。先述のスネサレフが危惧していたように、こ

の地域のムスリムが日本に与する可能性が果たしてあったのかと言うと、実際にはそれほど単純なことではなかった。ここでは新疆のムスリムが見ていた方向を考察してみよう。

たしかに当地のムスリムの視線は、東方の日本へも向けられていた。日野は、タルバガタイのロシア国籍商人について「予は日露戦役が、かかる偏僻の地にまで、いかなる影響を与えしかにして、一言せざるを得ず。…「中略」：予はこの地において、日用品買弁のため露国商の店頭に立つや、店主出で来たりて：「中略」…自国の短所を挙げて我が国の武勇を賞し、優遇歓迎、いささかも措かず」と述べている。「日野 一九七三：一七二」。他にも日露戦争に対する現地ムスリムの態度や「波多野・四八―五〇」、日露戦争後の「日本人への好意」などが観察されていた⁶⁵⁾。

ただし、マンネルヘイムは異なる見解を示しており、「私が出立前に良く聞いていた日本人への共感、稀に見る露わな日本びいきの例外を除けば、見出すことができなかった」[Mannepain 1909: 12]と報告しているのは、彼自身がロシア出身者とみなされ、日本人の調査とは別の反応が返ってきた可能性も考えられる。

よりまとまった関心のあり方は、新疆北部のタルバガタイに居を構えていたタタール人クルバンガリーによる記述に見ることが出来る⁶⁶⁾。彼の著作の出版は少し時期がずれ一九一〇年のことになり、そもそも情報源も『Teyiman』紙等のロシアで発行されていた定期刊行物に基づく二次的な情報であったが、明治維新や日本の急速な発展⁶⁷⁾、エルトゥールル号事件⁶⁸⁾、日清戦争などに注目していることは興味ぶかい。また当時のロシアムスリムの関心事として、日露戦争から第一次ロシア革命に至る過程におけるムスリムの政治参加にも筆は及んでいる。このように日本についての情報がある程度広まっていたために、日野が見聞したように、エルトゥールル号事件に由来する日本とオスマン帝国との親密さから、日本びいきを示す者たちも現れたのである⁶⁹⁾。

ただし、言うまでも無く、ムスリムにとつての巡礼地は西方にあり、そのまなざしが西に向けられていたこともたしかである⁷⁰⁾。少し前のことになるが、ロシア統治時代のイリ地方でも、新疆からの巡礼者によるロシア旅券の申請がなされていた⁷¹⁾。また、新疆にオスマン帝国方面から往来する人々についてもロシア側の記録に残されている。

新疆のロシアとの政治的なつながり、あるいは新疆に来往するロシア国籍

商人の存在は日本人による調査も大いに注目していたが、さらに人的つながりも西向きであったことに留意すべきであろう。つまり、露清国境を越えるムスリムのネットワークを想定することができ、実際にクルバンガリーの著作『東方五史』やその編纂になる人名事典⁷²⁾を見ても、とくに北新疆のタルバガタイとロシア領内のセミパラチンスクを結ぶタタール人を中心とするムスリムネットワークの存在は明らかであった。すでに述べたように、林出・波多野・日野の報告においても、新疆のムスリムとロシアムスリムとの関係性はある程度示されていたと言えるだろう。

一九〇五―七年の日本人による新疆調査の成果として、新疆（東トルキスタン）についてたんに清の一部としてイメージすると偏りがあること、この地域はむしろ西トルキスタン側との結びつきを強く持ち、ロシア帝国の影響力にさらされていることが改めて明らかになった。これは、日本（とくに陸軍）にとつて、対ロシア関係の中で新疆のことを処理すべき必要が生じた転機となったと言える。

それらが後の対新疆政策⁷³⁾の基礎となっている可能性は高く、以後もロシア（ソ連）との関係を意識しながら、日本は新疆とのかかわりを持つとしていた。一九三〇年代の関心・工作もその文脈に位置づけることができるだろう⁷⁴⁾。また一方では、調査の成果は、東洋学やより本格的なイスラーム研究とも重なっていったはずであり⁷⁵⁾、今後のより包括的な検討が望まれる。

結び

英露協商締結の一九〇七年を一つの区切りとして、日本の中央アジア（おもに新疆）調査を以下の点で改めて論じることができよう。第一に、英露の対立の場という国際関係上の文脈に、日本政府（陸軍・外務省等）の意図が交わって現地調査が遂行された点である。第二に、新疆のムスリムの現実は日本への思惑には逆らう形で―むしろ西側、すなわちロシア帝国側とのつながりが大きいことが明白になった点である。これは、ロシア領中央アジアは言うまでもなく、新疆についても、清の領域の延長上に見るアプローチには限界があることを如実に示している。

また、この時期の調査は、日本のアジア戦略の中でイスラームと現実に接する最初の機会であったと考えられる。清朝全土ではより大きな人口を有す

る回民（現在の回族）についても、このころようやくまとまった知識が蓄えられるようになった。おそらく初期の知識は、来日留学生によるものであつただろう²⁶。本稿で検討した調査報告書にも示されていたように、同じムスリムとは言え、回民と新疆のテュルク系ムスリムは、日本における認識において明確に区別されていた。それでも、ムスリム同士の連携、汎イスラーム主義などが知られるようになってくると、新疆のムスリムと中国他地域の回民たちとを結び付けて捉えるような考え方も現れる。その例として、初期の回民調査に従事した中久喜信周をあげておきたい。

漢口揚子江通信社の中久喜は、外務省の囑託により河南省における「回教徒調査」²⁷を一九一〇年に実施し、その成果を「河南の回教徒」としてまとめた²⁸。調査を請け負うにあたり記されたと思しき文章には、中久喜個人の見解に拠るといふ但し書きをつけねばならないものの、興味深い言が並んでいる。冒頭を紹介すれば、「回教徒は今や世界の政治的一要素と為りぬ」：「中略」：支那の回教徒も亦た將に成長して政治的動乱の一渦紋たらんとす。支那二十一省到る処に回教徒ありと雖も其巢窟とも称す可きは伊犁、新疆を第一とし」という書き出しになっている（傍点は筆者）。中国のムスリムを、新疆のムスリム（おもに今日のウイグルを指す）で代表させて論じたこの文章は、日本を訪れていたタタール人アブデュルレシト・イブラヒム²⁹の言も引きながら、ロシア帝国治下のムスリムが中国のムスリムと連絡を取り合っていることに触れ、ロシアへの対抗上も、新疆・中国のムスリムに関心を持つことが必要である、と主張している³⁰。あるいは調査報告書においても、知識の正しさはともかくとして、回民の歴史を「土耳其民族」と関連付け、匈奴以降の遊牧民（とくに古代ウイグル）の歴史から回民の起源を語っており、中国のムスリムを論ずる際につねに新疆のことを意識していたことがうかがえる。

彼の調査が中国における革命と関連して委託されたことは想像に難くないが、回民の反乱関与への危惧が調査の動機になっていると推測される³¹。この調査が日本人による本格的な回民研究の嚆矢と呼ぶべきものであること³²、さらに印刷された報告書が中国内各領事館を中心として配布され、少なくとも外務省の中でイスラームについての知識を共有する体制になっていたことなど³³、本稿で検討した新疆調査とも重ねて議論できる点が多い。調査報告書の内容とともに中久喜の個人的背景も明らかにする必要があるが、それには機会を改めなければなるまい。

今後の課題は多く残されている。ロシアの公文書中、ないし日本側の記録にさらに多くの史料がある可能性はきわめて高く、調査の必要性は疑いない。本稿ではほとんど触れることができなかった清朝史料における認識——中国が見た新疆——ロシア関係——も併せて考察する必要がある。また、本稿で分析した回民・新疆のムスリム・ロシア・ムスリムを結ぶ線は、チベット・トルグート・モンゴル・ブリアートをつなぐ仏教徒の線と交差している。日本の中央アジア調査もムスリムのみを視野に置いて行っていたわけではなく、モンゴル系のトルグートの存在や混乱するチベット情勢も相当に意識していたはずであり、二つの線の交点についても明らかにすべき課題と考えている³⁴。

※本稿は、平成二五年度科研費若手（B）「近代中央アジアの多民族社会と帝国の統治——新疆イリ地方の事例から」、同基盤（B）「東アジア諸国におけるムスリムと非ムスリムの共生——ライフスタイル変容の比較研究」、二〇一三年度サントリー文化財団「人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成」（研究課題——日本における回教政策と回教徒受容の源流、研究代表——店田廣文）の成果の一部である。

【註】

- (1) 本稿では、おもに日本政府（とくに外務省）および陸軍関係者を指して用いる。
- (2) より詳しくは、オムスクのロシア国立文書館が所蔵する史料を検討しなければならないが、十分な調査を行う機会を得ていないため、グレコフの著作 *Древко, Н. (2000) Русская контрразведка в 1905-1917 гг.: шпионаж и реальные проблемы, Москва: Греко, Н. В. 1996 «Русская контрразведка в Сибири (конец XIX - начало XX вв.)» Известия Омского государственного историко-краеведческого музея, № 4, с. 172-186* を参照する。タシケントに保存されているトルキスタン総督府の文書史料の分析も今後の大きな課題である。
- (3) 大林洋五（一九七四）「新疆を訪れた日本人」附 波多野南山「新疆偵察記」（抄）『愛知大学国際問題研究所紀要』五四、一四七—一七七頁、中田吉信

(一九八三)「新疆ウイグル自治区と日本人」『アジア・アフリカ資料通報』二二

- (4) 藤田佳久(二〇〇〇)『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』大明堂。
- (5) 王柯(一九九五a)『近代における日本と新疆(東トルキスタン)―イスラムとの出会い』山内昌之編『中央アジアと湾岸諸国』朝日新聞社、王柯(一九九五b)『東トルキスタン共和国研究：中国のイスラムと民族問題』東京大学出版会、王柯(二〇〇八)『日中関係の現在・過去・未来(四)戦争に収斂した「回教徒」への思い(上)幻の対中「回教工作」』『環』三五、二七四―二八五頁、王柯(二〇〇九)『日本侵華戦争と「回教工作」』『歴史研究』五期、八七―一〇五頁。とりわけ王(一九九五a)がロシアとの関係に詳しい。小松久男(一九九五)『一九〇五年前後の世界』『講座世界史5強者の論理』東京大学出版会も参照。
- (6) 野田仁(二〇〇九)『イリ事件再考：ロシア統治下のイリ地方(一八七―一八八一年)』『イリ河流域歴史地理論集―ユーラシア深奥部からの眺め』(窪田順平ほか編)松香堂、一四―一八八頁。
- (7) 駐露代理公使として、伊犁返還交渉についても打電(一八七九年十月三日)するなど露清関係にも通じていた。
- (8) 例外は、第一次大谷探検隊(一九〇二―三年)でロシア経由であった。白須淨真(二〇一三)『大谷探検隊研究の新たな地平：アジア広域調査活動と外務省外交記録』勉誠出版社を参照。
- (9) 西徳二郎(一八八六)『中亜細亜紀事』、陸軍文庫、第一篇九七頁。
- (10) 以下、外交史料館所蔵文書を中心とする関連史料は、アジア歴史資料センター(以下、JACAR)が提供する画像に拠っている。一八八〇年六月、「露国在勤西二等書記官帰朝旅中俸給支給の件」(画像目録[JACAR: Ref. A07060589600])。旧仮名遣い・片仮名等は適宜、筆者が改めている。
- (11) カザフスタン中央国立文書館(以下、ЦПА РК), ф.21, оп.1, д.679, лл.33-36)。以下、原則として西暦で表記し、ロシア史料はユリウス暦で示す(以下同)。
- (12) すれ違いの要因として、ロシア側は西の姓名の漢字表記を把握していなかったことが推測される。なお、本史料が収められているファイルには関連文書は収められておらず、その後の顛末はわからない。
- (13) この過程については山城智史が清朝側の戦略を軸に、イリ問題と琉球帰属問題の関連について分析している。山城智史(二〇一三)『日清琉球帰属問題と清露イリ境界問題』井上馨・李鴻章の対外政策を中心に『沖繩文化研究』三七、四一―八〇頁。
- (14) 『自明治十二年至明治十四年』3 伊犁地方ニ於ケル境界問題ニ関シ露清兩國葛藤一件(三)(第四三画像目録) 明治一四年六月二十七日 [JACAR: B03041149800]。
- (15) 『露清交戦ニ付局外中立ノ件』(詔書草案 [JACAR: B03041149500])。
- (16) F.O. (British Foreign Office), 881-4595-No.34 (駐日代理公使 Kennedy から外務大臣 Granville 宛宛て、1881 Feb. 8, Yedo 発)。本資料の利用については加藤雄三氏の厚意によっている。
- (17) 一八七八年、在東京露公使ローゼンの報告、日本政府が琉球に対する清の要求を拒絶したことについて、ロシア国立軍事歴史文書館(以下、РВИА), ф.451, оп.1, д.2, л.11 (北海道大学スラブ研究センター所蔵マイクロ資料「Russian Military Intelligence on Asia」, 242)。
- (18) 『東京朝日新聞』(明治三十三年九月十四日)。
- (19) ロシアの勢力拡大の阻止を狙って新疆に潜入しようとした浦敬一については、『東亜先覚志士記伝』上巻、黒龍会出版部、一九三三年。また王(一九九五a)に詳しい。
- (20) この時期のロシアによる諜報活動については、D. V. Павлов ほか(一九九四)『日露戦争の秘密：ロシア側史料で明るみに出た諜報戦の内幕』左近毅訳、成文社を参照。
- (21) Волынов, А. (1939) Японский шпионаж в русско-японскую войну 1904-1905 гг., Москва: Воениздат, Грехов (2000)。
- (22) 以下、『Грехов (1996)』がロシア文書史料に基づき示した人名である。
- (23) 歩兵少佐の平山治久および長瀬鳳輔のこと。彼らはロシア政府の許可も受けていたが(長瀬鳳輔(一九一〇)『露領中央亜細亜及土耳其内地旅行談(一)』『奉公』九〇号、五頁)、詳細をさらに西シベリア現地当局が追っていたようである。
- (24) 歩兵少佐の日下操のこと(佐藤守男(二〇一一)『情報戦争と参謀本部：日露戦争と辛亥革命』芙蓉書房出版、二八一頁)。
- (25) イリ事件ころから継続する新疆への関心については野田(二〇〇九)。
- (26) Снегарев, А. Е. (1907) «Медям, как политическое оружие в руках англичан, германцев и японцев» // Закаспийское обозрение, № 2, с. 66-69 (Туркестанский Сборник, Т.41)フ.スネサレフはトルキスタン軍管区の参謀将校であった。
- (27) 白須(二〇一一)、二七頁が、ロシアからの疑惑について史料を示している。
- (28) 波多野以下の五名は上海東亜同文書院二期生。調査全体の概要は、森久男、Шеф-Токтоб(二〇一〇)『東亜同文書院の内蒙古調査旅行』『愛知大学国際問題研究所紀要』一三六、一四一―一六五頁。
- (29) 日野に同行後、イリに滞在していたことについては王(一九九五b:三三頁)、房(二〇〇〇)。
- (30) もちろん藤田もロシア動向の調査という側面を無視しているわけではない(藤田

- (二〇〇〇)、一二九頁など)。波多野の調査記録については、レズラジイエル・モスタファア(一九九七)「大亜細亜主義と日本イスラーム教：波多野烏峰の「諜報からイスラーム」への旅」『日本中東学会年報』二二、八九―一二頁も、一部誤解があるものの言及している。
- (31) [ЦГА РК: ф. 46, оп. 1, д. 116, лл. 48-49]。②も写し。当時、ロシア領中央アジアの統治を担っていたのは、現地のトルキスタン総督府であり、その治下でイリ地方に隣接していたのがセミレチエ州であった。州都としての機能は現在のカザフスタン共和国アルマトウに相当するヴェールヌイに置かれていた。
- (32) 「小松原」は林出の出身地である現御坊市内の地名と考えられる。
- (33) 一九〇五年九月、オムスクのシベリア軍管区本部から参謀本部総局宛て [РГВИА: ф. 661, д. 76, л. 226об]。
- (34) 一九〇五年六月七日、カシユガル領事からの報告 [РГВИА: ф. 661, д. 67, л. 248]。これらの情報は後述するマンネルヘイムにも伝えられていたと考えられる。
- (35) 林出賢次郎(一九三八)「三〇年前に於ける『伊犁』行の回顧」『支那』二九一―一七二―一七三頁、藤田(二〇〇〇)、八三頁。
- (36) 明治三八年一月二四日、陸軍大臣寺内正毅宛て [JACAR: C10071779300]。一九〇五年六月三日、外務大臣から陸軍大臣 V. V. サハロフ宛て文書は、北京代理公使からの電文が、あたかも露軍が伊犁地方に進軍する予定であるという噂に関連していたことを示し、日本側が持っていた情報をまさに裏付けている [РГВИА: ф. 661, д. 73, л. 54]。
- (37) 明治三九年五月一九日、寺内宛て [JACAR: C10071807400] (一八画像目)。
- (38) 明治三九年八月一九日、駐屯軍報告第二〇号 [JACAR: C10071809500]。
- (39) 明治三八年五月九日 [JACAR: B03050330700] (一四三画像目)。あるいは、内田公使より西園寺外相宛て文書にも「清国辺境における露国の行動を注視せんが為めに外蒙古新疆及科布多に派遣したる」とある(五月一七日「明治三八年一〇月二六日から明治三九年七月六日」 [JACAR: B03050330800] (二五―二六画像目))。
- (40) 明治三九年三月九日発「蒙古新疆通信第四回」(金前掲資料の二三二画像目)。
- (41) 駐屯軍司令官押尾より寺内陸相宛て [JACAR: C10071808100]。
- (42) Греков (2000), с. 50. 以下の文献は、ロシア帝国における戦後の日本への対応にくわしいが、中国西北のことは考察されていない(シュラトフ・ヤロスラフ(二〇一〇)「日露戦争後のロシアの日本観：外務省と軍部、中央と地方(一九〇五年―一九一六年)」『ロシア史研究』八六、五一頁)。
- (43) 一三世は一九〇四―六年にはクローンに滞在していたためロシアからの接触も容易であった。さらにロシア帝国内のブリヤート出身のドルジエフの役割も興味深い(棚瀬慈郎(二〇〇九)『ダライラマの外交官ドルジエフ：チベット仏教世界の二〇世紀』岩波書店、七八頁)。ドルジエフと思しきブリヤート人についての印象は、後述する波多野養作の報告書にも見える(五九頁)。〇五年の一三世とロシアの東洋学者コズロフとの会見とそれに続く一三世の逃避行については Сергеев, Е. Ю. (2012) Большая игра. 1856-1907: мифы и реалии российско-британских отношений в Центральной и Восточной Азии. Москва: Товарищество научных изд. КМК, с. 237.
- (44) たとえば三浦稔「外蒙古視察復命書」 [JACAR: B02130417300]。
- (45) 明治四〇年一〇月二九日「外務省派遣員波多野養作外一名清国視察報告」 [JACAR: C0302295500]。
- (46) 外務省の資金は参謀本部次長の福島安正を経由して根津へ送られたという(ただし一九〇七年のことである) 藤田(二〇〇〇)、八二頁。同文書院とその関係者については、翟新(二〇〇一)『東亞同文会と中国：近代日本における対外理念とその実践』慶應義塾大学出版会を参照。
- (47) 明治四〇年八月印刷 [JACAR: B03050331500]。
- (48) イリに五カ月、タルバガタイに一カ月滞在した。
- (49) 後半はタルバガタイの部である [JACAR: B03050331300; B03050331400]。稿本と印刷(明治四〇年七月)されたものがある。本稿では印刷版の頁数に拠り、「林出：〇」のように示すこととする(同様に「波多野：〇」とする)。
- (50) 「林出：二」。一九世紀以来、「ノガイ」と呼ばれていたタタール人(シベリアやヴォルガ地方出身)が新疆北部において商業に従事するようになっていたことについては、野田仁(二〇一〇)『露清帝国とカザフ＝ハン国』東京大学出版会。
- (51) 「波多野：八七」。直接両都市を結ぶトルクシブ鉄道の開通は後年のことになるので、シベリアを迂回するルートを指していると考えられる。
- (52) 報告書中では「小教」ないし「トンガン」と呼ばれている。現在の回族に相当する。
- (53) とくに「林出：六八」では、ロシア政府が指導している訳ではないという譲歩を付けながら、「新疆に入り込み来れる露国人は何れも中央亜細亜の回人にして…」[中略]…彼等回人が自然に新疆の各地に其根柢を作り…「後略」と述べている。報告から読み取れるロシア勢力の浸透については、藤田(二〇〇〇)、一六七頁も参照。
- (54) 概要は金子(一九七五)を参照。ここでは、カシユガル等の新疆南部を訪れたのは日野のみであること、また往路において帰国途上の林出と会い情報交換を行った点のみ再確認しておく。
- (55) のちのフィンランド大統領として著名。その報告書は Минерский К. Г. Э. (1909) Предварительный отчет о поездке, предпринятой по Высочайшему повелению через

- Китайский Туркестан и северные провинции Китая в г. Пекин в 1906-7 и 8 гг. Сборник географических, топографических и статистических материалов по Азии, вып. L XXXI, с. 81-135.）れまぐよく知られていた英文の旅行記とは内容を異にしている。
- Смирнов А. С. (2007) Барон Маннергейм выполнил разведзадание российского Генерального штаба. 1906-1908 гг. // Военно-исторический журнал. №2, с. 24-27.）よれば、マンネルヘイムの調査行は皇帝の裁可により陸軍からの指示に基づいて遂行されており、現地から直接参謀本部宛てに報告を送っていたことが明らかになる。
- (56) 日野はロシアの駐イリ領事セルゲイ・フォードロフに面会したが、マンネルヘイムのイリ滞任時に便宜を図ったのはこのフォードロフであり、日野の存在がマンネルヘイムに捕捉されていてもまったく不思議はない。金子（一九七五）、二二七頁の示唆も裏付けることができる。マンネルヘイムは報告の結論部分でも、林出ら日本人の新疆滞任にも言及しながら、近二、三年の間に日本の中国西北における影響力が強まったことを報告している。とくに軍人である日野の行動に大きく注目し、陝西などへの日本人教師らの派遣と関連付けて、日本軍の勢力拡大を注視していることは興味深い（*Минергев* 1909: 156-158）。
- (57) 『新疆における露人の現状』（日野強（一九七三）『伊犁紀行』（復刻版）、芙蓉書房、第二部一九八一—二〇二頁）。
- (58) 明治三九年五月二〇日、林出の通信文（『明治三八年一〇月二六日から明治三九年七月六日』五四枚目）[JACAR: B03050330800]。またタルバガタイのタタール人の好意については「林出：五九」。
- (59) 『東方五史 *Tavrichi-khamsa-yi sharyi*』の概要については野田（二〇一一）、三三三—四三三頁。
- (60) 西隣のカザフ草原の例だが、急速に発展した小国としての日本イメージはロシア領中央アジアに存在し（宇山智彦（二〇一一）「カザフ知識人にとっての〈東〉と〈西〉——階層的国際秩序の認識と文化的精神性の希求」『ユーラシア世界』〈東〉と〈西〉東京大学出版会、一六五—一六六頁）、それが流入していた可能性は大いである。
- (61) 一八九〇年にオスマン帝国海軍所屬のフリゲート艦が日本近海で沈没した事件で、後述するように日本とオスマン帝国の友好的関係構築に大きな役割を果たした。
- (62) なお日野のテキストでは「ノルマントン」と誤記されている。新疆のムスリムにとっては「我が同胞たるトルコ人」という認識であり、そのトルコ人を救った日本人へは好印象を持っていた。日野（一九七三）、第二部一九九頁。
- (63) 林出によれば「彼らの念頭には只宗教的結合心ありて国家的団結心なく、財を成すと「回回教徒の聖地なる「メッカ」に行き礼拝せんことを」願っていた【林出：二二頁】。
- (64) 例として一八七三年にイリ地方のサドゥク某に対してトルキスタン総督の名前で発行された二年間有効の旅券がある【*ИПА РК*: ф. 21, оп. 1, д. 94, л. 11】。
- (65) Qurban' Ali Khalid (2005) *An Islamic biographical dictionary of the Eastern Kazakh Steppe, 1770-1912*, (ed. by A. J. Frank; M. A. Usmanov), Leiden: Brill. 野田（二〇一一）も参照。
- (66) 二〇世紀初頭の露清国境における越境については、野田仁（二〇二三）『帝国の境界を越えて——露清間の境域としてのカザフ』『歴史学研究』九二—二〇一—八頁。
- (67) 明治四五五年のレポート『滿蒙及新疆ニ対スル露国ノ経営』（王（一九九五a）、二五二頁も言及する）はロシア領トルキスタンも視野に入れた作戦を主張する【JACAR: B03030414500】。それは、諜報機関設置という形で具体化された（蒙古及新疆地方諜報機関配置の件）（大正七年の軍事課提出案件の決裁）【JACAR: C03022436400】。実際に、大正七年三月五日、支那駐屯軍司令石光真清から陸軍大臣大島健一宛て（「諜報機関配置の件」）【JACAR: C03022435700】に明示されているように、迪化（ウルムチ）には佐田繁治が派遣されていた（中田（一九八三）も参照）。あるいは、同年に新疆に潜入していた参謀本部関係者たちについても明らかになりつつある。このことについては房（二〇〇〇）、王（二〇〇八）を参照。
- (68) たとえば菅原純（二〇〇五）『ウイグル人と大日本帝国』『アジアワールド・トレンッド』一号、二八一—三二頁を参照。
- (69) 岸本美緒編（二〇〇六）『帝国』日本の学知三『東洋学の磁場』岩波書店を参照。
- (70) 一九〇七年の組織「留東清真教育会」については、これと前後するムスリム清国公使の来日も含め、王柯（二〇〇六）『二〇世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、一一六—一二九頁。註（73）も参照。
- (71) 王（二〇〇八）、二七五頁にも言及がある。実際にはこの地域におけるムスリムとは回民を指していた。なお、福建省のムスリム調査も同時期に行われていた（明治四四年七月二五日、駐福州領事高洲大助から小村外相宛て）【JACAR: B12081600300】。
- (72) 【JACAR: B12081600100; B12081600200】。外務省政務局長の倉知鉄吉の名前で依頼文が送られている。中久喜については、『東亜先覚志士記伝』下巻、黒龍会出版部、一九三六年、三五六頁。
- (73) アアデュルレシト・イブラヒム（二〇一二）『ジャボンヤ・イブラヒムの明治日本

探訪記』(小松香織、小松久男訳)岩波書店が示しているように、一九〇九年の日本滞在当時から、日本のマスコミにおいてその名が知られていた。たとえば『日本及日本人』第五一一号誌上にもイブラヒムの談話が見えるが(イブラヒム(二〇一三)、三七三頁)、中久喜は同誌にも寄稿しており、おそらくこの談話も目にしていただろう。中久喜自身は「韃靼の志士イブラヒム」と記している。また、イブラヒムも自らの国民との接触の経験を踏まえ、日本において彼らへの注目を喚起していた(イブラヒム(二〇一三)、四八八頁)。

(74) 中久喜による「支那回教徒の現状」(明治四三年五月一日受領) [JACAR: B12081600100] (二一四画像目)。第六画像目にも「新疆の調査を急務となす」とある(中久喜「支那各州の回教徒」より)。

(75) 片岡一忠(一九八〇)「日本における中国イスラーム研究小史」『大阪教育大学紀要』(社会科学・生活科学 二九(一)、二一―四二頁をはじめ、従来の研究史上では、遠藤佐々喜(一九一一)「支那の回教に就いて」『東洋学報』一一三が注目されていた。汎イスラーム主義にも触れるものの、遠藤の関心は、現状ではなく回民の起源・歴史にあったようである。回民の出自を「トルコ」と関連付けている点は、中久喜の論とも共通し興味深い。

(76) [JACAR: B12081600100] (一六画像目)。最初期にメッカ巡礼を果たした山岡光太郎の著作(『回々教の神秘的威力』一九二一年)が同様に配布されていたことについて王(二〇〇八)、二七五頁。

(77) とくにトルグートについては波多野・林出・日野の三者とも実地に調査を行っている。彼らの調査時には、トルグート郡王のバルタはすでに日本留学中であった。また波多野はグライラマとも会見を行うなど「波多野…五七頁」、仏教もまたイスラームと同様に多くの信奉者を持つ宗教として、日本では注目の対象となっていたに違いない。